

夏休み（彼女のいた夏）



福嶋康紀

Yasuki
Fukushima
2016.8.24

夏休み（彼女のいた夏）

第一章 プロローグ

僕は、九州の田舎から出てきて、アルバイトをしながら、関東にある美術系の大学に通っている学生だ。

僕には、家族という者はいない。

両親と妹を少し前に、交通事故で亡くしたからだ。

その時、自分は、実家を離れていた。

ある日突然、警察からの電話が掛かってきて、自分が家族を失ったことを知った。

家族で妹の誕生祝いの食事をしている店に、車が突っ込んだできた。

即死だった。

時速百キロ以上の猛スピードで、家族の席に突っ込んだそうだ。

公務員の飲酒運転が起こした悲劇だった。

その時は、話題性もあって、マスコミによって大きく取り上げられた。

それでも、三か月もすると、芸能界の不倫騒動や婚約発表なんかの話題で、紙面がにぎわうと、あつという間に周りは静かになった。

ショックで、自分の将来に対して何も考えられなくなっていた時に、偶然、妹の日記が出てきた。

兄は、美術を勉強していてとても尊敬できる人

まだ、絵描きとして評価なんかされていないけど、

私にとってはあこがれの存在

私も同じ学校を目指したい。

そして、一緒に同じキャンバスを歩きたい。

彼女なんかできたら少しショックだけど・・・など

そんな言葉が並んでいた。

妹はそんな風に見てくれていたんだ・・・そう思うと、ここで落ち込んでいたら、その妹の思いまで消えてしまいそうで、もう一度美大に復帰した。

幸いにも両親が残してくれた家と生命保険などで、アルバイトをしながらであれば、なんとか学生生活がおくれている。

ただ、家族を失った心の隙間を埋める事は出来ないままで、明るい青春と云った学生生活とは、程遠く情性だけで毎日をやり過ごしていた。

第二章 出会い

「お兄ちゃん」

彼女との出会いは、この言葉から始まった。

後で聞いたら、彼女はそんな言葉は言っていないそうだ。

彼女は、最初から不思議な女性であつたと思う。

授業が終わった後のアルバイト先であるコンビニを出て、自宅のアパートへ向かう暗い道に、彼女は、寂しそうにぼつんと立っていた。

一瞬、幽霊かなんかと思ひ、ひるんだが、彼女の背格好が妹に似ていたため、おもわず

「希美（のぞみ）」と大きな声で話しかけてしまった。

声を出した後ですぐ、妹は、もうこの世にいないことを思い出し、

「ごめん、亡くなった妹に似てたので、つい」と謝った。

その時の彼女の反応は、意外なものだった。

「そう、・・・・。」

「突然だけど、私、あなたの妹の代わりになっちゃダメ？」

いきなりそんなことを言われて、面食らい戸惑っている

「あっ突然こんなこと夜の小道で言われたら、気でも違ってるんじゃないかと思うかもね？」

「私、何も思い出せないの。記憶が全くないの。名前も住所も何故ここにいいのかも・・・・どうしていいかわからない」

そう言って、泣き出してしまった。

最初は、美人局かなんかかもと、警戒しそうになったが、どうも話がちぐはぐで、まったく理解できない。

背格好も妹に似ているが、歳も同じくらいだし、妹は少し幼い顔をしていたが、彼女は、そんな妹を少しだけ大人にしたような顔立ちをしていた。

触らぬ神に祟りなしと、思ったが、妹が生きていて記憶を無くしたて訪ねてきたような気がしてしまい、つい、こう話しかけてしまった。

「僕の部屋すぐ近くだから、付いてくる？」

コックリと頷くと黙ってついてきた。

こんな展開めちやくちゃだとは思うが、この話、滅茶苦茶なところから始まったのである。部屋に入ってきて、明るい電灯の下でよく見ると本当にきれいな顔立ちをしていた。

「妹も生きていたら、君みたいな女性になっていたのかなあ」
つい、口についてそんな言葉が出てしまった。

「妹さん、亡くなったの？」

「うん、生きていたらちょうど君くらいの年頃だ」

そこまで言って、急に目頭が熱く涙があふれてきた。

彼女は、すまなさそうに

「ごめんなさい」

と言ってきた。

僕は、涙を拭きながら

「ごめん、ごめん。でも何だか、希美が生き返ってきたみたいなのがして、うれしい」

そう伝えると、彼女もにっこりと微笑んだ。

彼女は、本当に妹に似ている。

姿かたちも似ているが、それよりも彼女の持っている雰囲気と云ったものが、よく似ている。赤の他人と言う気がしなかった。

「妹さんの名前ですか？希美さんって」

「そう、希に美しいと書いて希美と言う名前だった」

「ところで君の名は？」

「それが、私、自分の名前も住所も何もかも、思い出せなくて、ごめんなさい」

「あつ、ごめん、今さっき、そう言ってたね。もし、よかったら、ここに暫くいてくれませんか？」

初対面の女性にこんなこと言っちゃいけないけど、妹がいるみたいで・・・数年ぶりにあの頃に戻ったみたいで・・・」

「私も、ほかに頼るところもないし、お願いします」

そう言って、その日から二人の奇妙な同居生活が始まった。

妹や家族を失った悲しみを埋めるために、アルバイトと授業だけに打ち込んで、友達と一緒にお酒を飲むことなども避けていたので、経済的には結構余裕があった。

そういった訳で、次の日には、彼女を連れて近所の洋品店やスーパーを周り彼女の服やら茶碗などの日常品まで一通り買いそろえた。

近所の人には面倒なので、妹がしばらく一緒に住むことになったと言う事にしておいた。近所の人には、両親がなくなったことだけしか伝えていない。

妹が亡くなったと認めたくなくて妹の事は言い出せなかったのだ。

部屋の表札にも天野健一・希美と二人並べて記入した。

ここまでやって気づいた。

「勝手に君の名前、妹と同じ名前にしちゃったけど・・・」

「いいんです。その名前、私、違和感がないから」

「私は、あなたの事を何て呼べばいいでしょうか？」

「兄妹だから、兄ちゃんでもいいよ。妹もそう呼んでいたから。ぜひそう呼んでください。お願いします」

「それでは、お兄ちゃん、これから、いろいろお世話をおかけします」と言っ
て、ペコリとお辞儀をした。

それから、本当の兄弟のように、ずっとそうしてきたように、暮らしていた。
学校でも、最近明るいとか妙に勘繰られたが、笑ってごまかしていた。

第三章 初夏の日差しの中

希美は、いつもアルバイトが終わる時間になると、バイト先のコンビニの前で待っていた。一人で部屋にいてもつまらないのだそうだ。

何故かコンビニの中には、入ろうとはしなかった。

一人で、出歩いても良さそうなもんだが、記憶が戻らないので、友人を訪ねることもできず、下手に歩き回って、部屋に戻れなくなることを恐れていた。

「希美、いつも一人で部屋の中にもつままないだろう？」

と彼女の方を見ながら言っても、

「ううん、そんなことはない」

という返事しか返ってこない。

「大学も休みに入っただし、しばらくは、時間が開くので、二人で街に出て、希美の記憶を探そうよ」

「うれしいけど、もし記憶を取り戻したら、健一兄ちゃんと私の記憶は、どうなるのか考えると少し嫌だなあ」

「大丈夫だよ。忘れたりするわけないし、兄妹から恋人同士に出世するかも」

「それなら大歓迎」

と言って、真っ赤になってしまった。

その様子を見て、可愛いと思ったと共に、少し彼女を女性として意識するようになった。そんなことを、振り払うように次の日からは、朝早く起きて、少しでも記憶につながりそうなどころに積極的に出掛けて行った。

「兄ちゃん暑い」

と言われれば、エアコンのきいた図書館、結局、避暑を兄弟二人で楽しんでるだけのような感じだった。

ある日、青梅の山の川に出かけて行った時の事、溪谷の川辺に降りて足の水につけた途端、希美が急に怖がったので、びっくりして抱きかかえ落ち着くのを待った。

「どうした、何か記憶に繋がりそうな事があったの？」

「ううん、分らない。」

と言って、しばらく僕の胸に顔をうずめて震えていた。

この時は、何故、希美が怖がったのか想像もできなかった。

三十分ほどで元氣を取り戻した希美は、近くの食堂に入って、

「兄ちゃん、これ食べよ」

と、そうめんと書いたメニューを指さしていた。

「何だか懐かしい味がするよね」

と言ったが、そんなはずはない、関東と九州では、めんつゆのだしの取り方が全く違う。

・・・麺つゆの出汁は、あご出汁に決まっている。・・・

そんなことを思ったが、

「うん、なつかしいね」

と言ってしまった。

少し暗くなってきたので、山を下り明るい駅周辺で時間をつぶした。

青梅から中央線を使って国分寺にまで帰るのに電車ではなく列車に乗り込んでしまい、新宿まで行く羽目になった。

仕方がないので、最後部の目立たない二人掛けの席で座っていたら、いつの間にか眠ってしまった。

少し目を開けかけたら、こちらを見ながらに首をかしげるような姿が見えていた。しかし、気に止めずにもう一度眠りに引き込まれていった。

第四章 北へ

青梅から戻った次の日は、いつもと同じように、手掛かりのありそうなところへ、手当たり次第に出かけて行った。

交番なんかに行って聞いてみればすぐにわかりそうなもんだが、なんとなく交番へ行ってしまったら、二人の関係をうまく理解して、もらえないような気がして、避けていた。

一度だけ、足を向けていったのだが、道を尋ねる人や落とし物を探している人なんかが多くて、タイミングが合わず、警官の目にも止まっていなかった。それからはずっと避けている。

原宿の竹下通にあるカフェで、彼女が東北なまりの女の子の会話を聞き、何か少し引かかるものがあるようなので、北へ行ってみようと言う事になった。

最近、切符など買わなくてもスマートフォンが一台あれば、乗り物に乗るのには困らない。

一人分でも二人分でも銀行の口座で決済してくれるらしい。

そう言う事で、行き当たりばったりの旅行が始まった。

宿泊先のホテルでさえ全く人と顔を合わせることがなかった。

おかげで、希美と二人で同じ部屋で寝泊まりしても変な詮索を受けて嫌な思いなどしなくて済んだ。

二人、ホテルの同じ部屋の別々のベッドの上で、話し込んでいた。

「お兄ちゃん、なんか新婚旅行みたいだね」

「ほんとだ」

よくよく考えてみれば、兄妹ではない。

つい数か月前までは、見知らぬ縁もゆかりもない男と女だったのだ。

今は、実の兄妹、いや恋人未満と不思議な関係である。

「希美 東北弁の事、身近に感じるのかい」

「うん。なんだか自分の育ったところで聞いていたような安心感があったんだ」

「何か手掛かりが見つかるといいね」

そう言って、部屋の明かりを消した。

朝になって、午前中の早い時間にホテルを出発して、町の商店街などで聞き合わせてみることにした。

店の中に入っては、

「この子の住んでいた場所を探しているんです」と言って振り返ると

彼女は、きまってそこには居なかった。

別の店を見て回っているらしく、本人を見せられないので、手ぶり身振りの話をしてみたが、まったく手掛かりはなかった。

そんなことの繰り返しを一日中やっていたら、八百屋のおかみさんの方から話しかけてきてくれて

「この辺じゃなくて、太平洋側が数年前の大地震で被害が大きかったから、そんな娘さんの情報も見つかるかもしれないよ」

「ありがとうございます」

「いいよ、いいよ、あんたも大変だね」

そう言ってくれたので、明日その場所へ移動してみようと考えた。

「どこにいたの？肝心の時にいないんだもん」

「いたよ」

と、怪訝そうな顔をして、返事をしたが、すぐに気を取り直して

「ごめんね」と素直に言われ、つい

「いいよ」と言ってしまった。

「今日はこれくらいにして、明日は、太平洋側の海に面した地域をあたってみようと思うんだ」

「大きな津波に襲われたから、行方の分からない人の情報も集まりやすいし」

そう言ったとき、彼女の顔が少し曇ったような気がしたので、

「どうかしたの？」

と尋ねたが

「なんでもない」

と言って、腕を絡めて甘えてきたので少し自分の胸の鼓動が大きくなったような気がした。もう一泊ホテルを延長して、明日に備えて二人で早めにベッドの入った。

ここのホテルなぜか最初から、

「ツインの部屋は、もったいないよ」などと

勝手な事を言っていたが、強引にツインベッドの部屋にしてもらっていた。

第五章 三一一

その日の朝は、いつもより早かった。

彼女は、健一の腕を掴んだままの移動だった。

僕は、彼女が甘えているのは、昨日の夜の事があったからだと思っていた。

あの大事故のあった福島県の原子力発電所から、五十キロくらい離れた砂浜にやってきた。そこまでやって来て、彼女は、今までに見せたことのない確信に満ちた表情で、ゆっくりと話し始めた。

「お兄ちゃん、よく聞いて、私、あの日の事を昨日の夜に思い出したの、そして、今日ここにきて確信をもったから話すね。」

あの日は、高校の授業が終わりと友達と一緒に列車で帰っている途中だった、突然、地面が下から突き上げるように動き、それは、時間と共に加速度がつくように大きな揺れにまでなったわ、そのあと揺れは、横に大きく揺れて、止まっているその列車さえ

も気が付いたら線路のわきに弾き飛ばされていたの、幸い横倒しにはならず真つすぐのまま線路わきに跳んだ感じだったわ。

もう、皆パニックになってしまい、津波が来るってだれかが、叫んだの、そしたら、みんな昔からの言い伝えを思い出して、津波の事はある程度心構えがあつたので、冷静さを取り戻す事が出来たの、そこからは、みんな助け合うようにして列車から降り、車掌の指示で最寄りのもっと高い丘の上を目指した、三十分か一時間か、もう時間の感覚もなくなっていたけれど、沖の方から黒い大きな壁が、こちらを目指して迫ってくるのが見えて、とても恐ろしくて、ただ、ただ震えていた。

そんな時だった。誰かが叫んだの、子供が逃げ遅れているって、その指さす方を見たら、軽トラックの荷台の上で、泣き叫んでいる小さな女の子を見つけたの、まだ保育園に行っているくらいの小さな子だったわ。

誰もかれもが、もう間に合わない、と言って神仏に願っているような状況だったから、自分でもそう思っていたわ。でも、人間の行動ってわからないものよね、私、その女の子めがけて走り出しちゃった。

夢中で、その子を抱え上げた時には、もう数メートルのところまで、津波がやってきていた。

当然、もう助からないっておもったわ。

女の子を抱え、出来るだけ腕を高く上げて最後の抵抗をしていたの。

水が足元に触れた時だった、いつの間にか、頭上にやってきてくれた救助ヘリの自衛隊員が、その女の子を抱きかかえてくれて、・・・。

そこで安心したとこまでで、私の命は終わったみたい。」

「今、思えば、あの時、家族や友達にも、さよならが言えなかったし、年頃なのに男の人を好きになる経験もないままだった。

きつと、そのことが原因で成仏できずに彷徨っていたのね。

そうしたら、健兄ちゃんに出会えたの。でも、これで私の人生は、本当におしまいみたいだわ。健一兄ちゃんありがとう」

そう言って、彼女の足が波に触れたら、ゆっくりと波の音と共に、光の細かな粒になって月明かりの闇に消えていった。

僕は、駆け寄ってその光の粒を捕まえようとしたが、それは虚しだけだった。

その光は、するりと逃げて、空間に吸い込まれていった。

僕は、大声をあげて泣き叫んでいた。

しばらく、そこに立ち尽していたが、せめて彼女の正確な名前と住所を知りたい。

そして出来る事なら、彼女の家族を見つけて、このことを報告してあげたいとも思った。

彼女がここで津波に襲われたという事と、彼女が助けた女の子がいると言う事から、地元
の図書館の資料や彼女の事を書いた当時の新聞記事などで、すぐに彼女の事は、調べる事
が出来た。

彼女は、地元の高校に通うごくごく普通の高校生だった。

希美と言う名前に違和感がないと言っていたのは、彼女の名前も偶然、希美と言う名前
だったからだろう。

いや、偶然とは言えないかもしれない、彼女の事を書いた当時の新聞記事で、彼女の兄の
名が僕と同じ健一だったから……。

将来の夢は、保育士になりたかったそうだと。

とても素直な女性で、兄と二人兄妹で、両親と共に暮らす仲の良い幸せな人生を送っていたらしい。

彼女が助けた女の子は、今年、小学校の三年生になったようで、将来は、彼女と同じ夢、保育士になって助けてくれたお姉さんの分を生きてと言っているそうだと。

救助した自衛官は、彼女が、子供を自分に託したときに「お願いします」と言っていたように見えたと言った記事が残っていた。

その記事の続きに、彼女の家族もこの津波の犠牲者であったことを追記してあった。

彼女も自分と同じように一人ぼっちだった。

ここまで調べて、もう一度、彼女の消えた浜辺に行き

「君が生きていた証は、しっかりと残っていた。君が助けた女の子は、君の夢を受け継いでくれている」

と告げて帰ってきた。

第六章 真実

彼女の事を詳しく知って、今度は、自分の実家に帰って、妹や両親の事などもう少し整理しなければと思い、郷里の九州の田舎に帰省した。

実家は、そのままだった。

庭には、草が多い茂っていたし、まったく掃除をした気配もない空家同然だった。

事実、自分も大学に入ってからずっと帰っていないし、空家なのだが、荷物なんかはそのまま残してある。

鍵を開けて中に入ると、そこは葬儀の後片付けをした時のままに、生活感の全くない空間が広がっていた。

妹の部屋に入ってみた。

そこには、彼女の姿がないだけで、今にも部屋のドアを開けて、

「お兄ちゃん、勝手に人の部屋に入らないでよ」

と言われそうだった。

でも、その声の主はもうこの世にはいない。

そう考えると、涙がこぼれてきた。

妹もいないし、彼女もこの世界にはいなくなってしまったし、孤独感がその空間を支配していた。

そうして、雨戸をあけ、縁側に腰かけて荒れた庭を見ながら考えた。

仏様に線香も上げていない・・・

自分の家族の遺影に手を合わせることに抵抗があった。

まだ家族の死を受け入れていないのだろう。

そう言えば、近所に住む親せきも自分の帰省に気が付いてい無いようだった。

そのうち、気づいて声をかけてくれるだろう。

この家には仏壇と言うものはない。

別に宗教的な問題ではなく、ただあの時まで必要がなかったのである。

ただ家族の写真が遺影として線香立ての前においてあるだけだ。

その遺影の写真を見て、本当に別の写真はなかったのかと思ってしまう。

家族四人の笑顔の集合写真である。

この写真の笑顔は、とても幸せな家族の写真だが、遺影なのに残った自分まで写っているのは変だと思った。

その写真の事を思っているときに、玄関の引き戸から人が、入ってくる気配がしたので、隣の親せきが気付いてやってきたのだと思い。

急いで、玄関の方へ向かった。

しかし、そこで自分を待ち構えていたものは、思いもよらぬ人だった。

希美 そうあの福島で、光の粒になって消えた彼女の希美が立っていたのである。しばらく、その状況が理解できなかった。

すると、希美が口を開いて説明してくれた。

「今から話すことを落ち着いて聴いて欲しいの」

「いい？」

呆気にとられたままで、うなずいた。

「私があなたのもとに現れたのは、自分の事を探るためではなかったの、人は死んだら、誰かがお迎えに来ることになっていて、あなたの家族は、別の人たちがあの世へ案内していったわ。でも、あなたを迎えに行った私がこの世に未練があり過ぎて、あなたを迎えに行ったところで記憶と使命を忘れてしまい、迷える魂になってしまった。」

「あなたは、自分が死んだことにまったく自覚がないまま、魂が人に見える形になって、この世にとどまっていたの。だから、半分くらいは、現世の人と会話出来たりした。ただ私の姿は、あなたにしか見えてはいなかった。」

「でも、あなたのおかげで、私の未練も見つけたし、あなたが私の大事なパートナーだと言う事も見つけたわ」

そう言って、僕の腕にしがみついた。

「そうか、あの時、僕も家族と一緒に自分も死んでいたのか。だから、あそこの遺影がみんなの集合写真だったんだ。」

「それじゃ僕とかかわった大学の仲間たちは？」

「健一兄ちゃんは、実体のあった魂だから、しばらくの間、彼らの記憶の中には残るけど、それが何だったのかは徐々に記憶の中から薄れていくはずよ」

「そうなのか、少し寂しいな」

「でも、これからは、私と兄ちゃんは、ずっと一緒なの、普通はお迎えに行ったからといって、ずっと一緒ではないけど、二人とも彷徨える魂のまま、この世で過ごしちゃったし、生きていたら、一生に一度の大事なパートナーになっていたはずだったの、だから特別な関係が出来てしまったという訳ね」

「それじゃあこれからは、孤独じゃなくなるってことか」
そう言って、にっこりとした。

「それじゃあ、そろそろ、あの世とやらへ行きましょうか」

そう言って立ち上がったら、明るい光の粒になって、二人の姿が消えていった。
後には、また生活感のない空間が広がっているだけだった。

第七章 エピローグ

あと少しで、盆になろうかという時期、ガラガラと引き戸の空く音がして、隣に住む親せきが、入ってきた。

「天野さん一家が亡くなりんしゃって、今年でもう丸二年になるね」

「三回忌過ぎたか」

「あの兄妹は、ほんに仲のよか子たちやった。もっと長う生きていて欲しかったとやばってんね」

「そろそろ盆の来るけん、お供え物ば、あげとこうか」

「この家も継ぎ手ののうなったけん、何れ取り壊すことになるとやろうばってん、子供たちの笑い声が今でも聞こえてきそうな気がするとよ、出来るとなら、このままにして欲しいかねえ」

遺影の飾ってある場所にいた叔父が

「あら誰か、この家訪ねてきんしゃったとね」と尋ねると

「そげなはずなかよ。鍵は私しか持とらんけん」

そう隣の家の遠い親戚のおばさんが言つて

「でも線香の新しかよ、この写真も一家四人ときれいかお嬢さんが健一ちゃんと腕を組んで幸せそうに写つとんしゃあよ」

「本当やん」

「どれどれ、見してみんしゃい」

「あらあ、本当に不思議なことのあるもんたい」

いつの間にか、近所の幼馴染やら同級生なんかも集まってきた。

「それにしても、なあも気味が悪くないとは何でかいな？」

「健一ちゃん、あの世から彼女連れて盆に返って来んしゃったとかもしれんよ」

「それじゃ一つ」

と言つて、線香をあげてみんな手を合わせていった。

「そーういやあ、この家は、初盆に主がおらんかったけん、盆踊りばしとらんかったね」

「今年の盆は、この家の前庭で、みんなで盆踊りばしようか」

「そうやね、そげんしよう。」

近所の幼馴染も同じように

「今年は、健一ちゃんちで盆踊りば、みんなでしようや」

いつの間にか、人の賑わいがそこにあった。

遺影の中の僕と彼女が、お辞儀をした事と外で蛍が、二匹連れそって舞い上がっていった事には、誰も気が付いてはいないようだった。

完

著者

福嶋康紀

発行

福岡市南区野間四丁目27-17

美工房

※

この著作物には、著作権があり法律で保護されております。
著作者に無断での複製・改編・発行などは出来ません。